
冥界ノ夜想曲 —ハデス・ノクターン—

ミソギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥界ノ夜想曲 ―ハデス・ノクターン―

【Nコード】

N4930F

【作者名】

ミソギ

【あらすじ】

捨て子の少女ルーン・バルセルトはその日もいつもの平和な一日立って思っていたが、その平和は突然現れた一匹の獣によってたやすく引き裂かれ崩壊した・・・

opening(前書き)

この話は本編ではありません。次の第1劇からが本編です。

opening

薄暗い本棚に囲まれた部屋真ん中には古びたいすと机・・・

そこに一人の黒髪の女性が座っていた。

彼女は彼女の世界で女神と呼ばれる存在・・・

彼女は口を開いた・・・

「あなたはここに何をしにきたの？もし、物語を聞きにきたのなら

今一度、私とお付き合い願おうかしら？」

そういい、彼女は立ち上がり、ひときわ古びた本棚からその抜けるような白い手で

一冊の無題白紙の本を取り出した。

「このお話はまだ先がないの。ここから作りましょう？私が歌い、聞き手はあなた。

この話が、幸せな話か、それとも、不幸せな話か・・・
其れはまだわからない。」

その美しい声で女神は歌いだした。 私たちは聞き手物語に干渉することはできないけど
ただ聞くことはできる。

「それは・・・ほかの世界からはデイベイションと呼ば

れる世界・・・

そこには人と人の姿をした精霊達がすむ世界・・・」

さあ、いま物語は始まった 女神によって作られる新しき世界
が・・・いま・・・はじまった・・・

第1劇 引き裂かれた平和（前書き）

ここからが本編です

第1劇 引き裂かれた平和

チュンツチュンツチュンツ

冬の寒い朝、朝の日差しが山の中にある家を照らした。その中には一人の少女がいた。

白いベッドの中、彼女は長い黒髪を撒き散らし、手足を掛け布団の中に丸めて寝ていた。

やがて彼女の目がうつすらと開き・・・

「ふわああああつ。んー。」

あくびを一つして彼女ルーン・バルセルトはその体を最大限伸ばしながら起き上がり部屋の窓に近づき開け放った。

「んー。いい天気！」

空は雲一つない快晴。先ほど鳴いた鳥は窓があいたことに驚き、飛び立っていった。

「川で顔でも洗ってこようかなっ」

其れまでできていた白いパジャマ代わりのYシャツをお気に入りのラフな服に着替えて

「いってきます！」

ルーンは誰もいない家へつげ、少し遠い川へと向かった。

その途中、木々の切れ間にふもとの村が見えた。

道中、歩きながらルーンは昔のことを思い出していた・・・

ルーンはあの村の入り口に名前が書かれた紙とともに捨てられていた捨て子だった。村人は

あまりにも哀れに思い、我先にとルーンを取り合ったが、村の呪い師の老婆が、こう村人たちに言っただ。

「この子が進む道は、茨の道。誰かが親となりて、この子に親がいるという枷をつけては

ならん。あの山の中に家をこしらえてそこに住まわせるがよからう。」

呪い師はこう占い、翌年息を引き取った。こうして、ルーンは山の中一人で住んでいるわけ

だ、・・・と考え事をしているうちにほかにもたくさんの動物たちがきている川へとたどり

着き、水の中へと手を入れ顔を洗い終わった瞬間・・・

グルオオオオオオオン！！！！

「！？この雄たけびは・・・魔物！？」

ルーンが驚いている間にふもとの村のほうから、煙が立ち昇り始めた。

「ふもとが襲われたんだ！」

ルーンはふもとへと山を駆け降りていった。

途中、ごつごつした岩などに足をとられながらも精一杯急いだ。

「はあっはあっはあっ！」

そしてようやくたどり着いた村は・・・

「・・・っ！」

ついた村は見る影もなく破壊されていた・・・たくさんあった家はどれも破壊され、あれ

だけいた人も一人もない・・・その代わりに家々の瓦礫にどこ度々ころまだ新しい血が付いていた。

「・・・・・・・・」

ルーンが呆然とたちすくしていると背後の家の残骸のほうから

どすっどすっどすっ

と足音がしてきた。そして・・・

「っ!？」

バット振り向くとそこにいたのは、人の足を口にくわえた顔と胴体はライオン前足がダチ

ヨウ後ろ足が象極めつけに背には、はとの大きな翼という奇妙な生き物・・・キメラが家の

影から出てきた。

そのライオンの瞳はぎよろっとおびえたルーンを捕らえると

「ぐくんっ

足をひと飲みし、

ぐおおおおおおおん!!!!

雄たけびをしルーンに飛びかった。

「ひっ!?!」

ルーンは人の少女の平均的な運動能力しかないとため……

「っ!!!!!!」

ぶちぶちぶちぶちっ

右脇腹をいとも簡単に食いちぎられ……

「あ……。」

どさっ……

右脇腹から血を流しながら倒れた……

第1劇 引き裂かれた平和（後書き）

（注 この世界で言う魔物とは、下級の動物を操る精霊が遊び半分や兵器として作ったキメラである。

精霊・・・異能を持った人のこと下位と高位さらに特位がある
下位は獣 高位は五大自然 特位は光と闇を操る さらに力を使うためには・・・起動詞、という一人ひとつの言葉の列を唱えなければいけない

第2劇 冥界の夜想曲

「あ……。」

どさっ

自分の体が地面に倒れる音を聞いた……

ゴポッ

キメラに引き裂かれた右脇のお腹から少し遅れて血が溢れ出した……

そのキメラはいまだに視界にとどまっていた。

—どうしたの……？—

その姿にルーンが疑問をいだいた瞬間、

ドクンッ

—？—

突然、其れはきた。

ドクンッ ドクンッ ドクンッ ドクンッ

視界が真っ白になり、

—ああ、ついに死ぬのか……—

その覚悟は無駄になった。

ドクツドクツドクツドクツ

ルーンの瞳は今まで見ていたものを押しのけ、一瞬、真っ白な空間と

漆黒の扉をみた。

そして扉に鎖で拘束された女性を

「生きて・・・私の・・・」

その後は何を言ったのかその光景は消えてしまいルーンにはわからなかった。

だが、何か鍵がはずれるようにルーンの何かが解かれた・・・その解かれた力

の大きさに負けルーンは叫んだ・・・

「あああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

その瞬間、ルーンの髪の色は何かに奪われるかのように漆黒から雪のような白色に変わった・・・

ルーンの突然の変貌に驚くよりも、獣はただ獲物がまた動き出した

ことに観喜の雄たけびを上げた。

だが、その雄たけびよりも先にルーンを中心に周りの地面に奪い取った髪の色を

具現化するような黒い線が走り、円を描き、その中に幾何学的な紋章を描いた。

―なに・・・これ？―

ルーンは自分が出したものに驚きながらも

―ボクは・・・この力の・・・使い方を知っている？・・・

ただ、ルーンは何も考えず、頭が命じ、体が動くのに身を任せ
た・・・

ぐおんっ

獣はまだ倒れている獲物・ルーンに飛び掛ろうとするが、

キンッ

紋章の中に入ろうとするとはじかれてしまい、中に入ることが
できない

そうしている間に

まだ右脇腹から血を流しながら

ルーンは

その変貌した白髪を振り乱しながら立ち上がった。

ーンが右手をあて、

そしてその血の出ている右脇腹にル

・
・
」

「ひらけ冥府の扉・・・取り出すは浄の力・

消えた。

唱えると、ルーンの右手に光がとまり、一瞬で傷は

手を掲げると、

そのまま、ルーンは舞を踊るように左

地面の紋章はルーンの体を伝い、左手の甲に小さく
なりながらも現れた。

そのままルーンは己の中に流れる言葉の列
を読んだ。

「・・・冥界の深淵より来たれ、
冥界ノ夜想曲」
ハデス・ノクターン

その左手に黒く長い刃を携えた真っ黒な大鎌が現れた。

ぐおんっ

紋章が消えた瞬間にルーンに飛び掛っていた獣をもうすぐ触れる
というところで

ジャラッ

その長い柄についた千切れた鎖を鳴らし・・・

ヴォンッ ドシャッ

よけもせず、その左手に現れた漆黒の大鎌で冷酷に獣の首を切断した。

「・・・。」

ルーンは何をいわず、まだかすかに動いている獣の体を蹴り飛ばし、生存者はいないか探した。

「おおおおおっ

「・・・。」

生存者はいなく残っていた死体もすべてちゃんとしていなかった。腹部が食いちぎら

れたり、足と頭がなかったり、そういう死体ばかりだった・・・その食い残された死体

を集めルーンは火をたき、死体を火葬した。

ルーンはすくつと立ち上がり、村を後にした。

こうして家に帰ると最低限のものを取り出し、

「……冥界の深淵より来たれ、
冥界ノ夜想曲」
ハデス・ノクターン

ジャラッ ズズガァアン

大鎌を召還し、家を切り裂いた。ルーンは振り返らず、旅立
た。

第2劇 冥界の夜想曲（後書き）

大事な設定を忘れていましたので修正しました；w；

劇間 理由？

―ボクは・・・なんで旅に出たんだろう？―

旅に出て数日たったある日の夜星を見ながら、一人ルーンは思った。

―旅に出たときの記憶がはつきりしない・・・―

ルーンは自分の記憶を探ってみる、獣を殺し生存者を探したところまではわかるのだが・・・

―まあ、いいや。あそこにもいいことなんてもうひとつもないんだし・・・―

そう自分を思い込ませ、ルーンは考えるのを止めた。

暗い部屋に男と女がいた。

女は首をたれ、男は座っている。

「デイオラ・・・ノクターンが動いたそうだな・・・」

低い声が部屋に響いた。

「はい。現在、ポップスとバラードの力でクリアムという町にくるよう仕向け、これから私も向かいます。」

首をたれた女はいった。

「なんとしても捕らえよ。彼女らはわれらの子羊なのだから……」

男が言ったとたん、

バタンッ

「何事だ！」

部屋の戸が開き、黒髪の女が荒い息をして入ってきた。

「大変です！レリースで、ファンタジーが現れ、レリース支部が襲撃され、壊滅状態に陥りました！」

ハハハハハハ！！！！

部屋に低い笑い声が響いた。

「まったくあやつは！レリースには、Zを送れ、必ず捕らえ幽閉しろっておけ！」

ハハハハハハハハハハハハ！！！！

いつまでも笑い声は続いた。いつのまにか女はいなくなっていた。

―そうだ。いく先は、クリアムにいこう。あそこには、精

霊がたくさんいるらしいから、

扉とか、あの女の人とかのきつと話が聞ける・・・ボクも・
・精霊になっちゃったんだしー

ルーンはまどろみの中で思った。

劇間 理由？（後書き）

ファンタジー・ポップス・バラードは今後の話に大きく関係します
！ちなみにノクターンは誰かわかりますよね？・w・

第3劇 獣の宿命（前書き）

第3劇 獣の宿命

「なに・・・これ・・・」

クリアンについたルーンはつぶやいた・・・

ルーンの目の前にはクリアンと書かれた門があつて、

その向こう側は焼け野原だつた・・・

足元にあつた炭になつた家の破片を手にとるとまだ新しかった・

・

「少し前に大火事があつたの・・・っ！」

少し足を踏み入れたところに、子供の骨があつた・・・

ジャリッ

「!？」

バツと振り向くとそこには、黄色の髪をした女性が立っていた。

「どうしたんですか!？これは!？」

その女性に問い掛けると女性は無表情でいった。

「私がいたしました。」

意外な言葉に一瞬、ルーンの動きが止まった

「え!？」

「お待ちしております。ノクターン……いえ、ルーン・バルセルトさま。」

深々と女性は首をたれた。

「私はディオラと申すものです。」

ディオラは首をたれたままいった。

「……なんで？」

「は？」

ディオラは本気でわからないのか不可解な顔をした。

「なんで……こんなことしたの……？」

もう一度ルーンは同じ質問をした。

「……邪魔でしたからですよ……」

「な!？」

顔をあげたディオラは、いった。

「邪魔だったからです。ルーンさまが作る新しい世界には人間など不要なのです。」

ルーンはその言葉から目を背けた。

「ボクを誰か別の人と勘違いしてるんじゃない？ボクはそんなすごい人じゃないよ。」

「いえ。冥界ノ夜想曲が証です。」

驚愕にルーンは顔をゆがめた。

「何で・・・ボクの名前の能力の名前を？」

「私の力は手なずけた獣を意のままに操ることができます。」

その瞬間、ルーンはうつむいた。

「村をあんなにしたのは・・・あなた・・・？」

低い声でルーンは言った。

「はい。」

さらっとディオラはいった。

「なんで・・・」

「あなたを探すためと、あなたの覚醒を促すためです。」

ルーンはうつむいて硬直した。

「・・・お・・・ゆ・・・」

そして、ボソツと何かをいった。

「？」

「お前だけは！許さない！！」

バツと顔をあげルーンは言った。

「ふう・・・貴女のためなのに・・・しようがありません・・・
・お相手しましょう。」

「・・・冥界の深淵より来たれ、ハデス・ノクターン冥界ノ夜想曲！」

ルーンは左手をディオラは右手を掲げた

「・・・われに従い、わが手と足になれ、アニマル・カルマ獣の宿命」

ルーンは感情に任せて大きな声で、ディオラは静かにそれぞれの「起動詞」を唱えた。

第4劇 冥界ノ夜想曲のエフェクト

「あああああ！」

キンッ

ルーンは召還した大鎌・ハデス・ノクターンを力の限り振り上げ、たたきつけと連続攻撃を繰り返すが、ディオラはそれを細い棒^{タクト}で攻撃はしないにしろ防ぎ続けている。

「やあああああ！」

ガイーンッ

「あっ」

「もらった！！！」

ついにタクトを弾き飛ばすと、ルーンはディオラの懐にもぐりこんだ。

「やああああああ！」

「・・・フッフ」

「！？」

懐にもぐりこみ振りかぶった瞬間、ディオラはルーンの額に手

をかざし・・・笑った・・・

「おいで NO.7 ぐりぐり」

ぐうおおおおおおおん！！

「なあ！？」

ルーンの額に名前には似合わない奇怪な姿のキメラが激突し、吹っ飛んだ。

「った・・・くつあの棒がなくても、獣は操れるんだね・・・」

「

「今すぐ、私についてきてくれるなら答えますよ？」

ディオラはいつのまにか出した鳥を手に止まらせていった。

「ん。今で頭もすっきりしたし、さっきの答えなくていいよ！あなたについてくなんて真っ平ごめんだから！」

―さて、どうしようか・・・―

さっきはああいったがルーンにはディオラに勝つ手立てがなかった。

「ああ。ひとつだけなら教えてあげましょうか？」

「いいの？冥土の土産ってやつ？」

「まあ。殺すことはしませんが・・・動けなくするくらいは
しましうか。」

ディオラはさきほど出したキメラに棒を持ってこさせて、

「夜想曲^{ノクターン}の力はあなたの大鎌を召還するだけの力ではありま
せんよ?」

「え?」

「説明終わり・・・行きます」

バツとディオラは右手を空に掲げ、

「来なさい。わが隷^{しもへ}たちよ!」

ぐおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおん!

そういった瞬間、空から何十匹もの獣の雄たけびが空に響き、

ぎゃおおおおおおおん!

「さあ!いつまで続きますか?」

「つつわ!」

それらのキメラはすべてルーンに向かって落ちてきた!

「くつやああああああ！」

ぐじょーぎゃうー！

一番早かったものを手始めに切り、

「次っ！」

ぞんっ！

じりりりりりー！

じゅばっ！

きえええええ！

ぎいおおおおっ！

ぎええええ！

「はー！やー！」

キメラはものすごい勢いで減らしていくが少しづつルーンも疲労していった・・・

「はあ！はあ！」

ついに息が切れ、ルーンが息を整えるために立ち止まった瞬間！

きiiiiiiiiiii！

「あー！」

一匹の鳥がルーンの二の腕を切り裂いた！

ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオ！

残りすべての獣がルーンに飛び掛った

ぐしゃ！ぶちぶちぶち！

何匹かの獣の口が血で朱色に染まった。

「そろそろですか。」

傍観していたディオラは手を振り、獣を止めた。ゆっくりと獣が下がり始める。

「さあまだ生きておられますでしょう？どうですか？生かされた気分は。」

ディオラはルーンはもう何もできない状態で横たわっていると思ったが・・・

「まったく。最悪だよ。」

「！？」

ルーンはディオラの背後に立っていた。そして、引いてく獣達の真ん中には、先ほどルーンにぶつけるため、召還したあのキメラが肉塊となって転がっていた・・・

「いやなもの見ちゃったもん！」

ぞんっ

ついに大鎌の刃がディオラを捕らえ、その体を通り抜けた・・・

「あっ……?」

「ふふ……」

確かに刃は自分の体を通ったのに、自分の体に変化はなく、ルーンは目の前で笑っている。

「……ずいぶんとつあまくみられたものですね!」

なめられていると思い、手を掲げ、獣を操る!……はずが・

「!?!」

「あははは。さっきのお返しに教えてあげるよ。ハデス・ノクタン冥界ノ夜想曲
のエフェクト……夢の終焉、で力を封じたんだよ。この大鎌はそういう封じる力をもってたんだ。」

「な!?!」

「冥土でもあんま広めないでね!」

本当の刃がディオラを切り裂こうとした瞬間!

グオンッ

ルーンとディオラの間を風が通り過ぎ、目を閉じた一瞬で背に翼を生やした男につかまれ、

ディオラは高く舞い上がっていた。

「まったく、もう少し早くきてください。」

ディオラは悪態をついた。

「いや、すまん。まさか能力を封じられるとは思わなかったから。」

男はディオラを持ったまま器用に肩をすくめた。

「わたしもです。」

ディオラと男は一通り話した後、こちらを向き叫んだ。

「あなたがもし、あなたが何なのか知りたいのなら！レリースという町まで来なさい！」

そっぴい残すとディオラ達はすばやく飛んでいってしまった。

「……レリース……行こう……なんでボクがこんな力を持っているのか知るために――」

ルーンは落ちていた太い木の棒で十字をつくると町の入り口に立て、レリースへと急いだ。

休憩 女神の涙（前書き）

この話も本編には関係しない・・・関係するんですけど・・・ん！。
まあ、なんといいましょうか現在は関係しません。で、いいのかな
？まあそういう感じでお願いします

休憩 女神の涙

パアツと見ていた少女の立ち去る姿が光に消えた。そこは暗い部屋の中・・・物語が止まってしまったのだ。なぜ？と周りの音を聞いてみる。

・・・

歌が止まっていた。部屋の真ん中で座っていた女神を覗き込むと、彼女は頬に一筋の涙を流していた。その涙は雫となり、ポタンツと木でできた床に落ちた。

—どうしましたか？—

彼女はその声で目がさめたようにハツとしてこちらを見た。

—？—

「い、いえ。すみません。」

彼女はうつむいてしまった。必然的に目に入った女神の白銀の髪・・・先ほどの物語に出てきていたルーンと言う少女ようだ・・・

「すみません。話を中断さしてしまって・・・はじめましよう。」

そう言つと、彼女はまた歌いだそうと身構えた。まるで何かにおびえるかのように・・・
おびえる様子と先程の涙・・・

—あの・・・もしかしてこの物語・・・—

聞いてみたが、女神は悲しい感情を隠そうとしている笑みで言った。

「すみません。この物語の事は聞かないでください。」

—・・・わかりました—

話したくないというなら無理やり聞き出すのは悪いと思い、もとの場所に戻り座った。

「さあ、休憩は終わりです。はじめますよ?」

—はい。—

この話がどこまでもどこまでも悲しい悲愴曲の演舞には、ならないように・・・たとえこの物語は既に終わっている誰かの悲しい過去の話であっても、ボクは祈る。

第5劇 喜劇

―くそう・・・こんなところで、死んでたまるか・・・―

ルーンはおぼつかない足で、白い砂でできた道を歩いていた。
だが、ついにつまずいて・・・

「あっ！」

バタンッ

こけてしまった。立ち上がろうとしようとも腕に力が入らない。

―あ、やばい・・・―

ついに目がかすみ、前がなかなか見えない・・・

―ああ、ほんとにこんなところで死んじゃうのかなあ・・・―

ルーンは自分を殺そうとしている、憎き殺し屋をにらんだ。

その殺し屋は獲物を仕留めたことに歓喜したのか雄たけびを上げた。

グウウウウウッ

そう、その殺し屋とはただ単にルーンのお腹であった。元々大金を持っていたわけではないルーンが旅をしているわけであるから、路銀が尽き腹をすかす事は必然である。

―あ、眠くなってきた・・・これから死ぬのかな？―

ルーンが死を覚悟した瞬間、

「おねーちゃん！はやくーっ!？」

小さな女の子の声がした。

―へえ。天使って姉妹なんだ・・・―

現実逃避して考えている間に姉がついたのか、

「なによー!っ!？たいへん!運ぶから手伝って!」

「はぁーい。」

ルーンは自分の体が浮くのを感じながら気を失った・・・

・・・男が居た・・・この前の男のようだ・・・いすに座り、
何か言っている

「これで、二つの生贄がそろった・・・あと一つ・・・これ
で・・・冥界の扉が、開く・・・。」

―冥界の扉?・・・―

ルーンが疑問に思った瞬間っ

「!誰だ!」

つ!!!!!!!!!!!!!!

ルーンのほうを見て、男は言ったが、その目はもっと向こうを見ていた。

「私です。」

!

ルーンの向こうに居たのはディオラだった。

「……ディオラか……ノクターンはどうした？」

男は地から響くような低い声で言った。

「すみません。捕獲に失敗しました。」

「……どうしてだ？」

男の目に怒りの色が浮かんだ。

そこで接続が切れるように、景色は消えた……

薄っすらと目をあけると

ボフボフツ

┐
•
•
•
└

目の前で黒いものがなんかボフボフ言っていた。

―？何なんだろう？―

コマンド

触ってみる

嗅ぐ

突つつく

顔を近づける

感触

ザラザラ

色

黒

形

逆三角形穴が二つ・・・

湿気

かなり

ファ・・・ファ・・・

ルーンがボーツとそれを見ているとそれから出る音がボフボフからファッファッに変わった。

―・・・検証開始・・・・・・・・・・・終了・・・・―

ルーンが分かったときにそれは、今にも爆発しそうになっていた
たっ

己の脳からのよけろという命令に忠実に従った。

「とっつ。」

ぶあつくしよおおおい！！！！！！！！！！

もし、今よけなかったらその犬のくしゃみは、ルーンにかかっていただろう。

「・・・ここは？」

犬をあしらいながら、周りを見るとそこは外ではなく誰かの家の中だった。

「おきましたか？」

「起きた？」

この部屋の入り口から姉妹が顔をひょっこりと出した。

「うん。キミ達が助けてくれたの？」

「私見つけた。」

ルーンが言々と妹のほう答えた。

「ありがとね。」

「あの、お名前はなんとおっしゃるんですか？」

姉のほうだ。

「ああ、ボクはルーン、ルーン・バルセルトって言うんだ。君たちは？」

「リア。」

「レイア・マストです。」

両方が答えた。

「あの？」

「ん？」

レイアが話し掛けて来た。

「男の方なんですか？」

右を見る左を見る・・・この部屋には、犬と姉妹とボクしか居ない

「・・・ボク？」

「はい。」

「ボクは女だよ？・・・そんなに胸ないかな・・・？そんなに声低いかな・・・？」

軽くいじけたくなる。

「い、いえ。そんな事は！ちゃんと声は高いですし、胸だつて私よりもずっと・・・」

あちらがいじけてしまった。どうやら、かなり気にしているらしい。

「じゃ、じゃあ、どうして？」

はぐらかす様に聞いてみた。

「僕っていつてましたから。」

「ああ。」

・・・なるほど。

「これは・・・何というか癖なんだよね。ボクっていつの。」

「癖・・・」

レイアが顎に手をやり考え始めたら、

「おなかへったあー！」

リアがその静寂を破った。

「モスもそう言ってるよー！」

リアが犬を抱えて言う・・・モスって言うのかあ。あの犬・・・
犬にモスって・・・

グウウウウウウウ

その場にどうするかのようにルーンの腹がなった。

「・・・・・・・・・・。」

—気まずいっ—

あまりの気まずさにルーンは赤面した。

「・・・そんなにおなかへってたんですか？」

レイアが聞いてきた。

「・・・倒れる理由もそこでして・・・」

ますます小さくなって返事するしかルーンはなかった。

「すぐご飯にしますね！」

バタバタッ

あわただしくレイアは、走っていった。

そのあとのご飯はすごかった。肉とか山菜が所狭しと並んでいた。

食べながらいろいろな話を聞いた。此処はモス（犬）レイアとリアしか住んでいないとか、なぜレイアとリアは二人だけでココにすんでいるのかその理由とかいろいろ聞いた。

その夜はもう泊めさせて貰い、明日発つ事にした。

次の日の朝。

「ほんとにもう行っちゃうの？」

リアが上目遣いで聞いて来た。

「うん。ごめんね。」

「何か急ぎの用でも？」

レイアが真剣な顔をして言ってきた。

「はい。絶対に行かなければいけない所が。」

答えるとレイアは寄ってきて、手をボクの額に当てた。

「何を？「少し待っていてください。・・・」

レイアは力をためるように目を瞑り、言った。

「・・・今日は西へ明日は東へ明後日は南へその次は北へ旅に
祝福あれ、
フェアリー・ブレス」

次の瞬間、ルーンの体はまばゆい光を放った。

「・・・いまのは？」

「私の力です。これですばらくは飢えて倒れるなんてことはありません。」

レイアは言った。

「フフツ有難う・・・行ってきます。」

ルーンはレイア達に別れを告げ、旅立った。

第5劇 喜劇（後書き）

作者のもっとも苦手な喜劇はどうでしょうか？（ちなみに書くのが得意なのは戦闘ですおもしろいか面白くないかはおいといてw）意見、アドバイスなどコメントをお願いします。コメントは励みに、アドバイスは今後の役に立ちますのでお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4930f/>

冥界ノ夜想曲 —ハデス・ノクターン—

2010年10月10日04時20分発行